

ZOMBIE

甲斐 仁

私は、走っていた。  
急がないと、殺される。

視界には、俯きながらゆらゆらと動く、人の形をした  
ナニモノかの群れ。

気づけば、囲まれていた。

こんなところで諦めるわけにはいかない。

敵の足は遅い。私は勇気を振り絞ると、持っていたカ  
バンを振り上げ、奴らを振り払うように突き進む。

呼吸が乱れる。こんなところでくたばるわけにはいか  
ないのに。どこに道がある？

焦りが視界を狭くする。息が苦しい。

急いで懷に手を入れる。硬い触覚。これが私を救う希  
望。思い切り引き出して、それを構える。

ここで外したら一巻の終わりだ。私はすぐ、後ろから  
くる奴らの餌食になるだろう。

嫌な想像を振り払い、狙いを定め、そして腕をかすか  
に動かす。

音が響く。

パツと道が開ける。良かった。動いた。

背後から引き寄せられるように奴らが集う。だが、構  
っている暇はない。前だけを見る。

私はそれを大切に懷にしまうと、再びカバンを構える。  
走れ。もうすぐだ。

だが、油断は決して許されない。

息の乱れ。心臓の音。

耳に響くは、終わりを告げるメロディ。

最後の力を振り絞って駆けぬき、俯く奴らの群れの中  
に飛び込む。

同時に、ドアが閉まった。

「駆け込み乗車はご遠慮ください」

車掌のアナウンス。しかしそんなものは知らない。この電車にさえ乗れば、会社に間に合うはずだから。これで、上司に殺される心配もない。

私の視線は、手元のスマホに沈んでいった。